

平成 29 年度茨城県グローバル人材育成プログラム 研修報告書

筑波大学附属病院 形成外科 藤田悠気

研修先：Centre Hospitalier Universitaire de Bordeaux

Plastic, Reconstructive, Burn and Hand Surgery

平成 29 年 6 月から 8 月までの 3 か月間、ボルドー大学附属病院形成外科での臨床研修を行った。筑波大学での臨床研修では経験することの少ない Hand の外傷治療について多く触れることができた。また日本と欧州における形成外科手術・術後管理の違いについて肌で感じる事ができた。

■準備

当たり前だが、まずは自分の所属する医局・組織に海外研修の許可をもらうこと。幸い当科では海外研修経験者が多く、関堂教授に快くご了承頂いた。なるべく早く国際医療センターとコンタクトを取り、留学の意志を伝えておくが良い。

研修先の選定に制限はなく、先方の担当者と直接交渉して研修許可をもらうことなる。英語での電子メールのやり取りに不慣れで苦労したが、いい勉強になったと思う。私の場合、あまり時間がなかったためじっくり研修先を選定する余裕がなかった。研修先から様々な書類提出を求められるが、健康診断（特に感染症）と医師免許の英訳は時間がかかるため早めに取り掛かる必要がある。

■臨床研修



ボルドー市内にボルドー附属病院は3か所あり、形成外科はそのうちの Pellegrin 病院に属している。フランスの代表的な時事系週刊誌の Le Point によるフランス病院ランキングで2年連続(2016年、2017年)1位を獲得している。Pellegrin 病院だけでも巨大な病院であり、いくつもの建物があった(小児科は単独で大きな建物を占有している!)。Centre François-Xavier Michelet 内に形成外科、耳鼻科、眼科、頭頸科が集約されている。他の建物に比べると小規模だが、外来、入院施設、手術室に加え、専属の麻酔科医や集中治療室もあるため、不自由を感じることはなかった。

形成外科医は20名程度おり、常時手術室を3室使って朝から夕方まで手術が行われていた。症例はやはり手の外傷が多く、前室で上肢神経ブロックをされた後に入室となるため非常に効率がよかった。これは全身麻酔の症例でも同様で、麻酔覚醒は別室で行われる。術後管理は集中治療部が受け持つため、外科医の負担が少なく、手術に集中できる環境であると感じた。しかし、Hand surgery 部門のトップである Dr. Hussein Choughri は、近隣の病院は救急症例を受け入れないので、大病院に集中してしまい、医師が疲弊しているとおっしゃっており、日本と同じような状況なのだと感じた。

Aesthetic surgery の症例が多いことは容易に想像できたが、Gender confirmation surgery(性別適合手術)の症例が想像以上に多く驚いた。同時期に研修していたイタリア人が言っていたように、ひと昔前から欧州人は性に対してオープンになっており、こういった手術が増えているそうだ。日本において性別適合手術は一般的とは言えず、形成外科医がこういった人々への受け皿を増やす必要があると感じた。

■ボルドー

フランス南西部、大西洋に面した港町である。ガロンヌ川によって形成されるブドウ栽培に適した土壌によるワイン生産で有名であることはご承知の通りである。近年は観光都市としての開発が進んでおり、ヨーロッパで観光したい都市 No.1 といわれている。

フランスと言えばパリが有名であるが、一方で観光客にとっては治安の悪さでも有名である。レジデントの先生が言うには、ボルドーは夜に1人で出歩いても危なくないよとのことであったが、実際に危険な目(暴力はもちろん、スリ等の軽犯罪も含めて)に遭うことはなく、治安の良さを感じた。世界遺産に登録されている街並みは、清掃も行き届いており、美しかった。フランス料理・ボルドーワインの美味しさは言うまでもない。留学中の7月にパリ・ボルドー間を結ぶ TGV の新路線が開業し、所要時間が2時間程度となった。今後発展が見込まれるボルドー市街に加え、十分な規模の大学附属病院を有しており、臨床研修に適した場所と思われた。

現代の医療において、他国の情報に触れることは非常に容易であり、また、日本の医師たちは世界のスタンダードに追いつき、追い越すことを目標に日々の診療を行っていると思われる。正直なところ、自分が普段行っている診療と比べて革新的な部分を感じることは少なく、むしろ世界中どこでも標準的な医療が行われているのだという驚きを感じた。

フランス人は日本人に比べ、よく言えばおおらかであり、悪く言えばおおざっぱである。それは患者も同じであり、医師-患者関係はより friendly であった。形成外科では、生死を左右するような手術は少なく、QOL 向上を目指したものが多い。その QOL 向上とは患者の文化的背景や性格によって、意味が異なるものであり、フランスと日本では治療のゴールが微妙に異なっているように感じられた。

私が研修していた同時期に、イタリア人医師が研修に来ていた。異国人同士、いつも行動を共にし、無二の友人になれたと私は勝手に思っている。また、いつも私たち異国人に親切にしてくれたレジデントの彼女も、リップサービスかもしれないが、私たちが帰国する際には寂しいと言っていた。こうした海外の友人を得ることも海外研修でしかできない経験だと思う。



イタリア人と親切なレジデントの先生と。

この海外研修の機会を与えて下さり、支えてくださった、国際医療センターのスタッフの皆様方、形成外科スタッフ・レジデントの皆様方、また診療に穴をあけてしまいご迷惑をお掛けした、病棟・病院のスタッフの皆様方、大勢の方に感謝いたします。ありがとうございました。